様　式　Ｆ－１９－２

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　９ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）
研究期間：2018～2023
課題番号：１７ＫＫ００３２

研究課題名（和文）アンリ・ルフェーヴルとシチュアシオニストを軸とした都市の無名性に関する研究

研究課題名（英文）The Study of Urban Anonymity by Focusing on Henri Lefebvre and Situationist

研究代表者
南後　由和（NANGO, Yoshikazu）

明治大学・情報コミュニケーション学部・専任准教授

研究者番号：１０５２９７１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,300,000円
渡航期間：　12ヶ月

研究成果の概要（和文）：第一に、模型、ドローイング、地図制作、絵画などからなる、オランダ人の芸術家コンスタントによる「ニューバビロン」――住民たちの「遊び」によって形作られる集団的作品であり、たえず「変容」し続ける永続的なプロセスを内包した「もうひとつの生活のためのもうひとつの都市」を描いたプロジェクト――について、「トランス・メディア」という概念をもとに、5つのTransの接頭辞を持つ「翻訳」「変容」「移行」「侵犯」「伝達」が互いに連関しながら作用するプロジェクトとして論じた。第二に、日本の都市の「ひとり空間」の特徴およびそのコロナ禍における変容について、海外の都市の「ひとり空間」との比較を通じて明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
第一に、これまで日本では十分に研究されてこなかったコンスタントのニューバビロンについて、作家・作品分析を中心とする表象文化論のアプローチに、空間的形態と社会的形態の弁証法的関係に着目するアンリ・ルフェーヴルの都市・空間論を嚆矢とする社会－空間論を掛け合わせて論じることで、領域横断的な研究成果を挙げることができた。第二に、「ひとり空間」に関する研究は、未婚・晩婚化、高齢化、スマートフォンやソーシャル・メディアの普及などの現代社会の特徴に加え、日本の都市における空間、行動様式、コミュニケーションなどの特徴への認識を深める研究成果につながった。

研究成果の概要（英文）：Firstly, Dutch artist Constant's "New Babylon"-a collective work shaped by the "play" of its inhabitants, a project that envisions "another city for another life," an ongoing process of perpetual "transformation"-comprising models, drawings, cartography, paintings, and more, was examined under the concept of "trans-media," where the five trans prefixes-"translation," "transformation," "transition," "transgression," and "transmission"-synergize harmoniously. Secondly, the characteristics of "one-person spaces" in Japanese cities and their transformation during the COVID-19 pandemic were elucidated through a comparative analysis with "one-person spaces" in foreign cities.

研究分野：社会学、都市・建築論

キーワード：コンスタント　ニューバビロン　アンリ・ルフェーヴル　シチュアシオニスト　トランス・メディア　ひとり空間　都市　オランダ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

基課題である基盤（C)「アンリ・ルフェーヴルとシチュアシオニストを軸とした建築の無名性に関する研究」(課題番号 17K02327)では、第一に、空間を生産する主体を、建築家などの計画主体に限定せず、ユーザーや住民も空間を生産する主体と捉えたフランスの思想家であるアンリ・ルフェーヴルの建築論に関する研究、第二に、ルフェーヴルの思想の具現化であり、ボトムアップ的な集団制作の仕組みを考案した、シチュアシオニスト・インターナショナルのメンバーで、オランダの芸術家であるコンスタントによるアンビルトのプロジェクト「ニューバビロン」（1956-74）に関して、主に建築史・建築論の文脈にもとづいた研究を進めた。

本研究では、基盤（C）の研究内容を、(1) 1950～60 年代の「都市」に関する思想的研究、(2) 現代の「都市」における具体的な事例にもとづく経験的研究へと展開する狙いがあった。

(1) に関しては、シチュアシオニストによる「状況の構築」「漂流」「心理地理学」「転用」「統一的都市計画」のなかでも、主に「統一的都市計画」に着目し、シチュアシオニストとして一括りにされがちであった、コンスタントのニューバビロンについて、他のシチュアシオニストのメンバーとの「統一的都市計画」をめぐる方向性の違いを明らかにするところから研究を出発させようと考えた。

(2) に関しては、ルフェーヴルの空間論に関する研究として、東京をはじめとする日本の大都市に数多くの種類が集積する、カプセルホテル、漫画喫茶、半個室型ラーメン店などの「ひとり空間」に関する研究にはこれまで従事してきたものの、欧米やアジアの諸都市と比較した場合に、日本の「ひとり空間」の固有性がどこにあるのかには十分に言及できていなかった。

２．研究の目的

(1) コンスタントのニューバビロンは、住民たちの「遊び」によって形作られる集団的作品であり、たえず「変容」し続ける永続的なプロセスを内包した「もうひとつの生活のためのもうひとつの都市」であるという特徴を有していた。本研究では、建築史・建築論の文脈に閉じることなく、互いに交流のあったルフェーヴルとコンスタントの関係に着目し、空間化された表象の政治性を問うルフェーヴルの都市・空間論を介したニューバビロンの研究に従事することを通じて、基盤（C）の研究課題の内容を発展させ、1950～60 年代の「都市」に関する思想的研究へと展開することを研究の目的とした。

(2) ルフェーヴルの空間論に関する、現代都市の具体的な事例にもとづく経験的研究として、日本の都市の「ひとり空間」の固有性を、欧米をはじめとする海外の都市の「ひとり空間」との比較を通じて明らかにすることを研究の目的とした。

３．研究の方法

(1) コンスタントのニューバビロンの多面性と射程について、絵画、彫刻/コンストラクション、建築などのディシプリンごとに分断されることなく、それらの境界を「越境」するアプローチである「トランスディシプリナリティ」から着想を得た、「トランス・メディア」という独自の概念をもとに論じた。

(2) 日本の都市の「ひとり空間」の固有性を浮かび上がらせるために、欧米をはじめとする海外の都市における「ひとり空間」に関する事例収集、海外の研究者からの寄稿を交えたウェブジャナールの特集企画、海外の研究者とのワークショップなどを通じて、比較研究を進めた。

４．研究成果

(1) 2018 年 9 月から 2019 年 2 月まで、コロンビア大学の Visiting Scholar としてニューヨークに滞在し、シチュアシオニスト・インターナショナルとコンスタントの関係に関する研究に従事した。なかでも主に「統一的都市計画」を対象とし、コンスタントのシチュアシオニスト・インターナショナル脱退以後の動向や、現代の情報社会における展開可能性について考察した。またエンリケ・ウォーカー准教授、マーク・ウィグリー教授らの建築論やニュー・スクールのマッケンジー・ワーク教授らによるシチュアシオニスト研究の成果を踏まえ、ギー・ドゥボールをはじめとするシチュアシオニストの他のメンバーとコンスタントの「統一的都市計画」をめぐる方向性の違いを、技術や建築への態度の違いという観点から整理した。

(2) 2019 年 3 月から 8 月まで、UCL バートレットの Affiliate Academic としてロンドンに滞在し、現代の都市論におけるルフェーヴルとシチュアシオニストの思想の受容と展開についての研究に従事した。UCL バートレットの C.J.リム教授がこれまで進めてきた、建築のドローイングやマルチディシプリナリティに関する研究に対して、本研究では、学際性の概念をめぐる「ディシプリナリティ」「インターディシプリナリティ」「トランスディシプリナリティ」の違いを整理したうえで、コンスタントのニューバビロンを、絵画のディシプリンを軸とした「トランスディシプリナリティ」の実践という切り口から考察した。

(3) 基盤（C）の研究課題と本研究課題の内容を合わせてまとめ上げ、東京大学に提出した博士

論文「コンスタント――トランス・メディアとしてのニューバビロン」(学位取得は 2024 年 4 月)では、ルフェーヴルの都市・空間論を嚆矢とする「空間論的転回」における社会-空間論を補助線とし、美術史や建築史のみならず、社会学や地理学などの知見を包含した視点から、その多面性と射程を通史的かつ多角的に明らかにした。

コンスタントに関する先行研究は、主にオランダにおける Cobra を対象とした絵画研究と、英語圏における建築史・建築論の文脈に分断されてきたが、本研究は、それらのディシプリンに分断されることなく、絵画からキャリアを出発させたコンスタントが、絵画から彫刻／コンストラクションを経て、建築模型、さらには地図制作に至るまでの過程を跡づけた点に独創性がある。

「トランス・メディア」としてのニューバビロンは、絵画というディシプリンが共通の基盤をなし、彫刻／コンストラクション、建築、地図制作など、さまざまなディシプリン間を「移行」するなかで、既存の秩序や規範を「侵犯」し、模型、ドローイング、地図など、それぞれのメディアでは表現し尽くせなかった残余を、「もうひとつのメディア」へと「翻訳」しながら、芸術家と非芸術家、空間的形態と社会的形態などの関係性に「変容」をもたらす。それは、絵画の「ディシプリナリティ・コード」の拡張と収斂の反復によって、各々のメディアの残余や差異をあぶり出し、それらをもうひとつのメディアを介して「伝達」しようとする営みであった。このような「トランス・メディア」としてのニューバビロンを、5 つの Trans の接頭辞を持つ「翻訳」「変容」「移行」「侵犯」「伝達」が互いに連関しながら作用するプロジェクトとして結論づけた。

(4) ルフェーヴルの空間論に関する研究の一環として、CCA（カナダ建築センター）のウェブサイトで、日本の都市の「ひとり空間」の歴史的背景や特徴についてインタビュー出演した映画『When We Live Alone』(2020 年) ――東京を舞台として、世界の主要都市で増加している単身者を含む、さまざまなタイプの「ひとり」の背後にある社会の変化が都市や建築に与える影響を多面的に析出したドキュメンタリー映画――と同インタビュー記事のテキストが公開された。

ひとり焼肉店やひとりカラオケ店の増加など、集団向けコンテンツの個別化という現象に着目し、都市の近接性や高密性という条件や価値についても考察した。

新型コロナウイルス感染症のパンデミックが単身者の生活に及ぼすグローバルかつローカルな影響について討議した、ドイツ日本研究所での国際ワークショップ「パンデミック時代前後における親密圏」では、「コロナ禍による日本の都市の〈ひとり空間〉の変容」と題した研究発表をし、日本の都市に見られる「ひとり空間」を、「専有型」「半専有型」「共有型」「離接型」「近隔型」に分類したうえで、コロナ禍において「ひとり空間」がどのように変化したのかについて考察した。具体的には、コロナ禍において、従来は互いに離れていた「ひとり空間」が、オンラインで接続されていくようになる「離接型」や、住宅でリビングを書斎代わりにするために、近くにいる人を間仕切りなどで隔てるなどの「近隔型」のひとり空間が増殖するようになったことを指摘した。

都市の「ひとり空間」に関する研究をめぐって、アメリカやイギリスに加え、カナダやドイツなどの研究機関および研究者とのネットワークも広げることができた。また、ルフェーヴルの思想の受容と展開についての研究に従事することを通じて、ルフェーヴルの空間論と「建築の社会学」をめぐる理論的研究を架橋する接点を見出すことができた。

(5) 日本と欧米およびアジアの諸都市の「ひとり空間」の比較研究として、東京ビエンナーレの「批評とメディアの実践のプロジェクト」のウェブジャーナル『RELATIONS』において、「COVID-19・ひとり空間・都市」と題した特集を組んだ。現代都市における「ひとり空間」は、家族や組織のあり方、性や結婚をめぐる価値観、パブリックとプライヴェートをめぐる境界意識、働き方、経済状況の変化など、世界の国々に共通するグローバルな事象と、それぞれの国や地域に固有のローカルな事象が絡み合ったものとしてある。特集では、日本のみならず、海外の都市の事例にも光を当てることで、日本の都市における「ひとり空間」のあり方を相対化するとともに、ソーシャルメディアをはじめとする情報化や COVID-19 などを背景とした「ひとり空間」の増殖や変容という世界で同時進行する事象にアプローチした。

ただし、アジアをはじめとする諸都市のフィールドワークにもとづく、日本の「ひとり空間」との比較研究には至らなかったため、この点は今後の課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 南後由和	４．巻 -
２．論文標題 コンスタント――トランス・メディアとしてのニューバビロン	５．発行年 2024年
３．雑誌名 博士論文（東京大学）	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 南後由和	４．巻 1768
２．論文標題 コンスタントのニューバビロンと“　遊び”-ホイジンガの批判的継承	５．発行年 2022年
３．雑誌名 建築雑誌	６．最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 南後由和	４．巻 －
２．論文標題 『サザエさん』にみる「ひとり空間」とカウンターカルチャー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 雨のみちデザイン（http://amenomichi.com/shuuiron/nango3.html）	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 南後由和	４．巻 vol.5
２．論文標題 ひとり焼肉店から考える都市の近接性と高密性	５．発行年 2021年
３．雑誌名 MEZZANINE	６．最初と最後の頁 68-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 南後由和	4．巻 No.130
2．論文標題 離接化と近隔化が進む、都市のひとり空間	5．発行年 2020年
3．雑誌名 city&life	6．最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 南後由和	4．巻 Vol.69 No.3
2．論文標題 現代都市の個別化した生活様式――P2Pプラットフォームとシェアリングエコノミーの行方	5．発行年 2020年
3．雑誌名 都市計画	6．最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 南後由和　聞き手 長澤夏子・宮原真美子・難波和彦	4．巻 5月号
2．論文標題 社会学の空間論的転回とマテリアリティ	5．発行年 2020年
3．雑誌名 建築雑誌	6．最初と最後の頁 20-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 南後由和	4．巻 令和元年度版
2．論文標題 ひとり空間、都市はソフトなコミュニティを創れるか	5．発行年 2020年
3．雑誌名 佐倉市国際文化大学講義録	6．最初と最後の頁 208-216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 南後由和	4．巻 1-2月号
2．論文標題 注目の書 著者は語る 『ひとり空間の都市論』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 リアルパートナー	6．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 南後由和	4．巻 395
2．論文標題 都市の「仕切り」考。	5．発行年 2018年
3．雑誌名 東京人	6．最初と最後の頁 7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 南後由和	4．巻 407
2．論文標題 モバイル・メディアと都市	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東京人	6．最初と最後の頁 30-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　6件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 南後由和
2．発表標題 コロナ禍による日本の都市の〈ひとり空間〉の変容
3．学会等名 国際ワークショップ「パンデミック時代前後における親密圏」ドイツ日本研究所（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2022年

１．発表者名 加治屋健司・清水知子・鴻野わか菜・南後由和，司会 毛利嘉孝
２．発表標題 都市と芸術：東京ビエンナーレを考える1970-2020/21
３．学会等名 LIVE RELATIONS! vol.01 DAY2・東京ビエンナーレ2020/2021（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 加治屋健司・清水知子・鴻野わか菜・南後由和，司会 毛利嘉孝
２．発表標題 批評とメディアの現在と未来
３．学会等名 RELATIONS SYMPOSIUM1、東京ビエンナーレ2020/2021、3331 Arts Chiyoda（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 門脇耕三・齋藤精一・南後由和・宇野常寛
２．発表標題 都市の未来を（コロナ禍を通して）考える
３．学会等名 遅いインターネット会議、SAAI（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 南後由和
２．発表標題 withコロナ時代のひとり空間
３．学会等名 scene 特別トークイベント「ひきこもる都市」vol.5（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Yoshikazu Nango
２．発表標題 Constant’s New Babylon as the Transmedia
３．学会等名 Department of Architecture, Faculty of Architecture and the Built Environment, Delft University of Technology（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 南後由和
２．発表標題 拡張する平面性・トランスメディア――コンスタントのニューバビロン
３．学会等名 表象文化論学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 北山恒・髙橋一平・南後由和
２．発表標題 そして家族になる――都市はやわらかい共同体をつくれるか
３．学会等名 ミサワホーム株式会社Aプロジェクト室・トヨタホーム東京株式会社主催シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計6件

１．著者名 南後由和	４．発行年 2023年
２．出版社 学芸出版社	５．総ページ数 256
３．書名 「シチュアシオニスト・インターナショナル」松田達・横手義洋・林要次・川勝真一編著/寺田晶子イラスト	

１．著者名 南後由和	４．発行年 2023年
２．出版社 屋台本出版	５．総ページ数 272
３．書名 「現代屋台の社会学」中村睦美・今村謙人・又吉重太編『日本のまちで屋台が踊る』	

１．著者名 南後由和・西田編集長・中島りか・ミズタニタマミ	４．発行年 2021年
２．出版社 tmyc	５．総ページ数 91
３．書名 都市のみる夢	

１．著者名 横浜国立大学都市科学部編、南後由和	４．発行年 2021年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 1052
３．書名 都市科学事典	

１．著者名 南後由和	４．発行年 2018年
２．出版社 滋賀県立大学環境科学部環境建築デザイン学科DANWASHITSU	５．総ページ数 260
３．書名 「建築・建築家の社会学に向けて」『雑口罵乱9』	

１．著者名 南後由和	４．発行年 2018年
２．出版社 TOTO出版	５．総ページ数 456
３．書名 「線を引くこと――藤村龍至の建築的思考」藤村龍至『ちのかたち――建築的思考とその応用』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「COVID-19・ひとり空間・都市」、『RELATIONS』 vol.8
https://relations-tokyo.com/2022/03/23/yoshikazu-nango/
“Solitude as a Hinge”, Japan Story
https://japanstory.org/perspectives/solitude-as-a-hinge
「コロナが変えた人とのつながり 多様化したひとり空間」, 『朝日新聞』デジタル
https://www.asahi.com/articles/ASP5X5H90P5WUHMC00V.html?iref=pc_rensai_short_1255_article_2
南後由和「同調圧力社会で「ぼっち」になりたい 『ひとり空間の都市論』」『DANRO』
https://danro.asahi.com/article/12856552
南後由和「それぞれの「距離」感」『web中公新書』
http://www.chuko.co.jp/shinsho/portal/113481.html
南後由和・浅子佳英「〈ひとり空間〉の時代に移動はいかに可能か」『LIXILビジネス情報』
https://www.biz-lixil.com/column/urban_development/ps_interview003/
「東京に「ひとり空間が多い理由」, WEDGE Infinity, 2018年4月26日
http://wedge.ismedia.jp/articles/-/12620

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	ウォーカー　エンリケ (Walker Enrique)	コロンビア大学・ＧＳＡＰＰ・准教授	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
主たる渡航先の主たる海外共同研究者	リム　Ｃ．Ｊ． (Lim C.J.)	ロンドン大学・ＵＣＬバートレット・教授	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
アメリカ	コロンビア大学	GSAPP		
イギリス	ロンドン大学	UCLバートレット		